



景観

LANDSCAPE

KEIKAN

上越市景観形成情報誌「景観」第5号

〒943-8601 新潟県上越市木田1丁目1番3号 TEL 025-526-5111 FAX 025-525-4154

この情報誌は再生紙を使用しています。

景観

LANDSCAPE

KEIKAN

上越人のDNAを探る

特別企画

歴史のおくりものと暮らす

講評

第8回上越市景観デザイン賞

座談会

温故知新の心に学ぶ

私だけが知っている、とっておきの場所

ぶち景観みつけた

みつけるが宝物

子どもたちが探検隊

まちは舞台、みんなが主演、観客より

上越市
景観形成情報誌
2003

No.5

上越市



特別企画

Living with the gifts of history

歴史のおくりものと暮らす

私たちのおじいさんやおばあさん達が大切につくりあげてきた古い建物は、その時代の生活を映し、また、このまちの景色をつくり出してきました。これらの建物と共に暮らす豊かさ、穏やかさ、そして風景をこれからも伝えていきたいものです。

手入れの行き届いた庭から無量庵を見る。



無量庵をお借りしてのあかりと家具の展示会。歴史ある空間と優しい光の相乗効果。



人の残す家、家がむすぶ人 武家屋敷跡

Samurai estate ruins

古い建物がその価値を知られぬまま壊されてしまうことが多い中、奇跡的に取り壊しをまぬがれ、今も使い続けられている建物が西城町にありました。

暮らす

江戸時代後期の漢学者の屋敷として伝えられている、無量庵を訪ねた。

漆黒の板壁が屋根の雪からしたたった水でしっとりと湿っている。

雪と、木々の香りがまじった清々しい空気の中、引き戸を開けて中に入ると、控えめな玄關から部屋が見える。

こじんまりとした造りは外も中も同じで、通りがかりながらもその存在に気づかない人も多いことと思う。そのくらい控えめなのだが、注意深い人ならその家の持つ微妙な美しさにはっとするはずだ。

普通よりも屋根は低めに作られているた



「日本憲政の父」尾崎行雄により「無量庵」と命名された。



昔は住まいとして、今は特別なお客をもてなす茶室として、愛され使われている。



め、少しひらべたく、薄い日本的な箱を思わせるその外観にもちゃんと理由はある。

高田城が建てられたとき、それが平城だったため、殿様より高くは不敬である、という理由から屋根はこのようになったそうだ。また、床下に賊が忍ばぬよう、家全体の基礎も低く、外壁も漆黒に塗ったということだった。

その由来からおのれを低くしながらも、その端正なたたずまいで自然周囲の空気までもただされるような上品な威厳がある。やわらかな緊張感、とでもいおうか。

部屋に入ると年代を感じさせる内壁、調度品が

私たちを迎えてくれる。

全体的に落ち着いた色合いで、静かな落ち着きを来客にもたらししてくれる。

壁には『無量庵』というこの庵の号を墨で書いた額がかかっている。『無量庵』というのは、「ここでは誰も誰かのことをはかることができない」という、人間はすべて平等の、大きな価値を持った存在であるという理念に基づいてつけられた、深い意味のある号なのだ。この号を付けたのは、この家の持ち主と親交のあった「日本憲政の父」と呼ばれる尾崎行雄だということだ。その信念ある名前は、この家の持つさりげないが人を拒むことがない温かさを持った雰囲気になんまりとなじんでいる。

家の歴史を探るといろいろな人との出会いが見える。今でもこの家のご主人は、人を招き、温かくもてなし、この家で人と人をつないでいる。この家で行ったお見合いで、何組も夫婦の縁を結んでいるというお話もうかがった。人が家を愛情をもって残し、家はそれに返事をするように多くの人と人を結んでゆくのだ。訪れた時のご夫妻の笑顔に、しっかり結びついた家との絆を見る思いがした。

歴史のおくりものと暮らす



本堂正面にある龍の鍔絵。細部の髷まで丁寧に作られており大迫力。



昭和の始め、五智在住の彫刻家滝川美堂が手掛け、この寺のシンボルとなっている仁王像。

横なぐりの風雨を避けるため下見板が張られているが、窓部などでは白い土蔵造りの美しさが健在。扉を全て閉めると中は真っ暗になるという。



ロマンとコミュニケーションの寺 土蔵造りの 寺院群 Earthen temples

歴史的な建物からは、私たちの祖先がこの土地で生活していくために生み出した「知恵」や「文化」を学ぶことができます。直江津の土蔵造りの寺院群もその一つです。

緩やかに上る坂道の途中、観音寺参道入口に身長1メートルちょっとの仁王様が立っている。本当に、がんばって立っているという風貌がなんとも微笑ましい。目の前の道は、シャカシャカと人が行き交い、車が走り去っていくのに、そんな中であってこの仁王さんはじめ、寺全体が「そんなに焦らなくて、ゆっくりいきないや」と諭してくれる。

そんな独特の安心感がある。そしてその安心感は、代々のこの寺と住民との関わり方にあった。「歴代住職はみな、周囲の人とのコミュニケーションをそれは大切にしてくま

た。お茶やお花を教えたり、御詠歌の会を催したり。私も嫁に来た時はそりゃあ随分人の出入りがありましたよ。」

直江津という所は、いったん火の手があがると浜風にあおられて町じゅうを覆い尽くし、大火に発展してしまうことがしばしばあった。寺はその中であって、人々の信仰の場所のみならず避難場所として機能してきた。

観音寺も明治31年の大火により、それまであった本堂をすっかり失うことになったのであるが、檀家はもとより当時の著名人、有力者からの寄付もあり、約30年の月日をかけてようやく再建を果たした。昭和に入ってから、39年の新潟地震の

際、近くの衣料品店の家族を避難させ、しばらく堂内で商売をさせてあげたなど、常に人々の「心のよりどころ」として機能してきたのである。

「よりどころ」といえば鎌倉時代、兄頼朝に追われる義経が平泉に向かう途中、立ち寄った寺として有名である。その時、義経はここに観音像を納めている。

もう一つ興味深いのは、手前にある池である。

「兜池」とよばれるその池は、深緑色で底が全く見えない。まるで何かが埋まっているというか、沈んでいるようである。聞けば、義経が鎧や兜を投げ込み、追手の目をくらましたことが名前の由来になっているとか。

自然に水が沸き、枯れた事が無いその池は、いにしへのロマンを鎮めるのかのごとくたっぷりと水をためていた。

〔土蔵造りとは〕

木材を露出させないよう土を塗り重ね、さらに漆喰で表面を仕上げた工法をいいます。防火性能が評価され、江戸時代前期には諸々の建築に使用されるようになっていました。

直江津の中心市街地の中には、6棟もの土蔵造りの本堂を持つ寺院が集中しています。これは全国的に見ても異例のことだといわれています。直江津では一たび火災が起こると大火に発展してしまうことがしばしばあったため、大切な心の財産を守るお寺の本堂を燃えにくい土蔵にしたのでしょう。

横なぐりの風雨を避けるため、下見板が覆われていることも、このまちの気候を物語ります。この寺院群はこのまちの風土が産み出した、興味深い文化財なのです。



●林正寺

秋になると一際目立つイチョウの木があるお寺です。平成14年10月、「むかし遊びとお話の会」がこのお寺で開催され、地域の親子の交流の場として一役買いました。

●聴信寺

「3・8の市」の通りにある聴信寺も土蔵造りのお寺の一つ。亀の彫刻をあしらった懸魚も、火災を除ける願いが込められているのでしょうか。

参道から観音寺本堂を望む(左頁)。義経が兜を隠したといわれる兜池(写真左下)。

おくりもの寺らす
Learn with the gifts of history



相談室に続く階段。人造石研ぎ出し仕上げ。



内装の吹き抜けには細工の施された天井やコリント風の柱がある。

◆ 第四銀行高田支店【木町3-3-2】

銀行

昭和初期に全国的に流行した銀行建築。外装はレンガ風タイルの重厚なデザイン。吹き抜けには細工の施された天井やコリント風の柱。第四銀行130支店の中でも珍しい古い建築物で空調など苦勞されるそうですが、高田地区の銀行・本町通りのシンボルとして、社員の皆さんは日々愛着を持って仕事をされています。

城下町・高田、港町・直江津、頸城平野や中山間地域…市内にはそれぞれの特徴を持つ歴史的建造物が残されています。ここではその一部を紹介します。

じょうえつ

レトロ建築

Exploring Joetsu retrospective architecture

探訪



九谷焼タイルのお風呂。洒落た都会生活の一端がうかがえる。



流行った持ち送りの庇

洋風町家

◆ 大島電気【木町6-4-23】

2階部分の西洋風意匠が明治期の洋食店というハイカラな経歴を偲ばせる町屋建築。「若い頃は流行のものが良かった。年をとって古いものの良さを感じるようになりました。この建物も父の代から。改造もしていますが、歴史的なものを楽しみ、大切にしていきたいと思っています」と大島社長。本町の町屋で歴史が息づいていました。



◆ 土蔵の鏝絵【大町】

鏝絵（こてえ）とは、漆喰の上に鏝で浮き彫りに描いた絵のこと。上越でも古くからの農村集落に散見できます。この加賀街道に面したお宅の土蔵の鏝絵の絵柄は「龍と唐獅子」。着色も施してあり、迫力があります。市内には、他に波や鶴などの鏝絵があり、歩く楽しみがまた一つ増えそうです。

鏝絵



◆ 北方茅葺住宅【北方】

約200年の歴史を持つ茅葺きの家で、主はご先祖様と暮らしておられます。庭には苔を敷き詰め、秋にはケヤキやモミジなどの庭木の色づきを愛で、燕達がひと時暮らし、主のその様な暮らしはご先祖様達の暮らしなのでしょう。使い勝手よく整えられた水周りも、この家を最終の家とする心構えと思われ、30年毎に6年間かけて葺き替えられる茅葺きは北方の里の美しい景観のひとつとなっています。

茅葺



窓を開け風を通せば夏でも冷房器具は必要ない。



日本たて乾草を持つ葺



◆ 岩の原葡萄園【北方】

川上善兵衛設計の石蔵は現在まで使われる事によって岩の原葡萄園の象徴的存在となっています。明治31年に三和村の大光寺の石で作られ、隣接した雪室は昭和30年代まで使用されていました。土屋根は平成2年に断熱材に替えられていますが、壁面の積み石は年月を感じさせない美しさ、微妙な色合いです。石蔵の中に入ると、濃密な遥な時の流れを感じます。かつての土屋根を支えてきた梁や柱は遅しく、並んだ樽の中では過酷な環境に耐えられる力のあるワインが静かに熟成されています。

雪室

昭和30年まで使われていた。された雪を使い、樽を冷やしていた。



歴中の
おくりもの
と暮らし
Living with the gifts of history



◆ 聖公会高田降臨教会

【西城町3-9-17】

校舎の活用方法で注目された滋賀県豊郷小学校の設計者ウィリアム・メリル・ヴォーリスにより設計されたといわれる教会建築。尖頭アーチが建具や腰壁のあちこちに施され、教会独特の雰囲気を醸し出しています。赤いトタン葺きの尖塔と土色の壁が愛らしく、今日も小さな子ども達の元気な笑い声をやさしく包みます。

教会



「説教浄瑠璃コンサート in 真行寺」

直 江津TMOで何かしようって話になった時、「交流」が生まれるものを仕掛けたいな、と思ったんです。だから大人と子供と一緒に遊ぶ“むかし遊びとお話の会”、商店に地域の人が描いた絵画を飾る“アート縁日”を企画しました」実行委員の一人、重原さんが熱く語り始めました。

これら「交流」の一環、説教浄瑠璃コンサートは熱心に勤めてくれるメンバーがいて企画はしたものの「実は僕達、説教浄瑠璃は聞いた事がなくて、難しそうだし暗そうだし、内心、お客さんが集まるかなってとっても心配でした」と振り返ります。

しかし、結果、前売り券は完売、会場で行ったアンケートも大変好評でした。



演目は直江津とつながりのあるもの。歴史を感じさせる寺院という空間、地域とゆかりのある演目、現代に生きる我々が聴く、という過去と現代の交流が見事に実現しました。

ところで、なぜお寺でコンサートを開催しようと思ったのでしょうか。「その土地にふさわしいおもてなしをしようと思ったら、その土地に残る古い建物

でもてなすのが一番良いのではないかと。みんなで話し合っているうちに、自然に決まったんです」同じく実行委員の一人、江塚さんが続きます。会場を真行寺にしたのは、直江津の建物をいろいろ検討した結果、100人位集まって聞くのにちょうどいい大きさだったからだそうです。

「自分の住んでいる『まち』のことを意外と知らない人が多い。こういうイベントは自分のまちの歴史や良さを知るきっかけになる。それが自信や誇りにつながると思う。そんなことが、自分のまちをどのようにしていきたいのか考える力になるんじゃないかな」と重原さんは考えます。彼らの若いパワーに誘発され、古い建物から新しいまちなみが生まれてくる、そんな気がしました。



説教浄瑠璃コンサート実行委員 江塚友之さん



説教浄瑠璃コンサート実行委員 重原 稔さん

Interview 直江津TMO



本町6丁目町内会長 西島 正さん



高田日活支配人 熊谷栄美子さん

Interview 高田TMO



活動レポート Activity report Historical building preservation movement

歴史的建造物を生かした活動

昨年、高田・直江津それぞれのTMO*が歴史的建造物で催し物を開催しました。多くの市民が歴史的建造物に触れるきっかけになりました。これらの活動をレポートします。

Report 1

「景観劇場 in 高田日活」

景 観劇場は平成13・14年に高田日活と旧小妻屋を中心に開催されたイベントです。きっかけは20年程前にまでさかのぼります。

「本町3・4・5丁目近代化事業が行われた頃から、本町6・7丁目はどうするのか、という話がありました。商店ばかりではなく、住宅や事務所、問屋が混在していますからね。いろいろ検討したようですが、まちなみの大改修にまでは踏み切れなかったのでしょうか。」本町6丁目の町内会長西島さんが静かに話し始めました。

このような中、本町6・7丁目は古いまちなみや歴史的建造物などの地域資源を活かしていこうという考えが生まれました。地域住民によって長く温められてきたまち

づくりの構想は平成13年にTMOの後押しがあり、実現する運びとなります。高田日活、旧小妻屋を中心としたにぎわいづくり「景観劇場」の開催です。このイベントは城下町花ロードと同時期に開催されました。

高田日活では、平成13年に話題の映画と懐かしい映画の2作品が上映されました。また平成14年には趣を変え、景観寄席と景観ライブが開催されました。景観寄席、景観ライブは昔の下小町・高田座に近い使われ方。「舞台や客席の大きさもちょうど良かった」と演者が語るのも当然でしょうか。これらの催しは、建物の使い方に一石を投じたのは間違いありません。「4年ほど前にとりまの建物が壊されて、通りから映画館の建物が見えるようになり

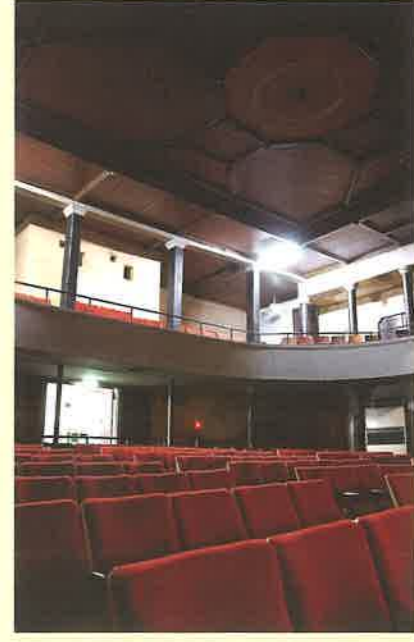


ました。すると、昔の西洋建築を懐かしむ人や、建物のスケッチを描く人が現れて…。昔のまちのにぎわいをなつかしく思い出す心の中の風景と、現在残されている高田日活の建物から「景観劇場」という言葉が生まれ、多くの人を惹きつけたのではないのでしょうか」高田日活の支配人熊谷さんが話します。

また、昭和の時代から続く町内会のまとまりが景観劇場の成功を支えたことを忘れてはいけません。特に本町7丁目婦人会の花のオブジェは第4回城下町花ロードで特別賞をもらっています。

「景観劇場のアンケートでは、多くの方たちから歴史ある建物を残して欲しいと言う意見がよせられました。しかし、建物を支える当事者にはなかなか難しいところがあります。」と、西島さんはチクリと指摘します。「ただ、昔のまちなみを偲ばせる建物の多くが既に失われてしまった現在、今あるものはますます大切にしなければなりません。」

地域を愛する気持ちが「景観」という言葉に表れています。まちづくりへの試みはまだ始まったばかりです。



上越市の歴史的建造物の特徴は？

編集委員（以下編）：藤井先生は昨年「歴史的建造物の保存と活用に関する調査報告書」をまとめられました。調査を通じてどのような感想をお持ちになりましたか？

藤井：高田地区の雁木と町屋、近代建築、個人的な和風建築、社寺仏閣、中ノ俣の古民家などを見ました。特に感心したのは雁木についてです。雁木は江戸時代以来かなり広く豪雪地帯に分布していましたが、徐々に無くなって今ではほとんど姿を消しつつあります。理由は融雪道路になって、積雪時の歩道を確保する必要がなくなったことと、大きな火災や震災にあって町屋と雁木と一緒に無くなってしまったからではないかと思っています。ですから、上越市では雁木が総延長18キロメートルも残っていると知って大変驚きました。江戸時代の高田の地図と現在雁木の残っているところの地図を重ねるとほとんど一致します。雁木があったところが引き継がれたということです。これは高田が震災に遭わなかったこと、雁木が私有地で、家を持っていらっしゃる方が雁木を所有し、修理をされてきたということです。明治・大正・昭和と家の建て替えに伴い雁木も

敷蔵』を使って会席料理のお店をされていますが、きっかけはありますか？

青山：私は、食に対して、また古いものに対することでたくさんの想いがありまして、自分なりに何らかの形で発信したいと思って始めました。私は古いものは全て宝物だと思えますので、「見立て」と申しまして、糸巻きをちょっと形を変えてお花を生けてみたりとかしてあります。それは自分自身がそういう中において気持ちが良いからです。でも、そういう風にするとお客様も「居心地のよさ」のよう

座談会

Table talk

なものを感じてくださるようになります。編：古い建築物の魅力は何でしょう？

青山：一口で言うと「癒しの空間」なんです。私もそう思いますし、皆さんそうおっしゃられます。土蔵の土壁、柱の木、畳の草…みんな自然の素材でしょう。そういうものが醸し出す癒しの空間なのだと思います。

編：柴田さんは大町で立派な吹き抜けがある町屋にお住まいです。

柴田：台所とか風呂などの水回りは2回改築したけど、吹き抜けより前の部分は絶対に直さないつもりなんだ。なんで古い家に住んでいるかって言われると、意地もあるけどね。

雁木と町屋

編：さきほど藤井先生のお話にありました雁木と町屋ですが、今、そこに住む人の減少という問題があります。

青山：今風に言えば「ちょっと、うざりたいな」ということもありますが、なんか一声かければ人の気配が感じられるような、そういう温もりがなくなってきましたよね。編：町屋が非常に暗くて、寒くて不便な生活を強いられていると感じて外へ出る。残っている人たちは、今風に建て替えた結果として残っているわけですね。

郷愁ではなく、子供達に伝えたい 温故知新の心に学ぶ

Learning from the past as we look to the future

歴史的建造物の魅力とは？

編：青山さんは直江津の独特の「雁

木」を使って会席料理のお店をされていますが、きっかけはありますか？

柴田：私の近所ですね、代が替わった時に団地のほうへ引っ越されて、その時の挨拶状に「緑と太陽を求めて…」とあったんですね。やっぱり、身につまされますね。そうだなあって。

青山：陽の当たらない所が多すぎますもの。編：高田のまちはそれでも多少は裏に干し物を干せるくらいは緑があるんですけど、直江津はもうまったく無いんですね。ですから、洗濯物は玄関に干して(笑)。表通りなのか裏通りなのかわからない。

柴田：建築家の大橋さんって方がね、町屋の見本みたいなものを設計したんですけど、坪庭を使っているんですよ。上を透明なもので包んじゅう感じてね。

藤井：お客さんが入るところは古いところを使って、裏で実際に炊事等されるところは近代的ですね。それはお客様をもてなす大事

なところは昔から受け継いだ古典的ないいところを使う。実際に生活をする上で合理化しなければならぬところは近代化するという

ことですね。藤井：お客さんが入るところは古いところを使って、裏で実際に炊事等されるところは近代的ですね。それはお客様をもてなす大事

なところは昔から受け継いだ古典的ないいところを使う。実際に生活をする上で合理化しなければならぬところは近代化するという

ことですね。藤井：お客さんが入るところは古いところを使って、裏で実際に炊事等されるところは近代的ですね。それはお客様をもてなす大事

なところは昔から受け継いだ古典的ないいところを使う。実際に生活をする上で合理化しなければならぬところは近代化するという

歴史的建造物との共生

吉原：建築の方は、いろんな興味を持っていらっしゃると思うんですけど、郊外の1戸建て住宅とかマンションに懸けるだけの力を町屋のほうに振り向けていただけたら、どんなに良いかと思っています。今の人はカタログ文化に馴れていて、自分の頭の中で良いものを構築するのはなかなか難しい。だから、住宅産業の方がパンフレットなり住宅見本を見せて、「これだけいいですよ」「ここへ来たら、太陽、緑いっぱいですよ」とアピールする。ところが古い町屋の空間に行けば、さっき言われたように癒しの空間とか、「ああ、こういう空間、すごくいいね」と思うけど、なかなかそれを体験できない。だから、快適な町屋空間の見本を作って「こんなにいいんですよ」と見せてあげないといけないと思います。ところが、一戸建てやマンションの見本ばかり見るから、自分たちは如何にひどい所に住んでいるかっていう「刷り込み」ばかり…(笑)。

職人仕事の復興

吉原：良い空間なら必ず、どんな人でも気持ちが良いし何か力をもらえます。だけど、ちょっとその辺が今うまくいってないのではないのでしょうか。捨てるのは簡単で、買ってくるほうが早いという。松代でカール・ベクスさんという人が築何百年の民家を住みやすく直していらっしゃる。屋根は落雪式ですし、床暖房、壁暖房にして、キッチン全部、今風です。ところが、これには金融公庫からはお金が出ないそうです。今風の住宅には、金融公庫は全額投資をする。誰もが「築何百年のこっちはいい」という空間なんです。ところが、現実にやろうとすると、

誉め合い認め合う

編：近代建築の例ですが、あるお宅は、みなさんいい建物と言ってくさるので、「残してもいい」とおっしゃっている。一方、所有者が「そういうことは面倒だから、早く壊してしまえ」ということもある。個人のものでも公共のものでも、いいと思う目線がまちの景観を作っていく、守っていくための大きな原動力になるのではないかと思います。青山：町屋に住む方が感じていらっしゃる便利さや不便さ、そこを行き交う人が「ああ素敵だわ」と思うことの落差がありすぎるように思います。やっぱり、住んでいる人、まちにいる人達が「これがいいんだ」という意識、それが景観なんだと思います。

藤井：古い建物や町屋をあまり良くないと思っていられる方も多くいます。だからいいところがあったら、いいところを誉めあう、悪いところをけなしていたらどんどん価値が下がってしまいますから。いいところを誉めあって意識が変われば、それが「誇り」になりますから。

柴田：上越市の東のほうの農村で、いらなくなったはさ木を一列にダーッと植えたんですよ。見事にね。地元の人たちから「もったいないから」という提案もあったようです。ああいうのをうんと誉めてください。

藤井：誉め合いましょう。

編：確かに住宅は個人の所有物ですが、景観とか、まちなみは公共の財産に近いものだと思います。家の中は自由に、外観や表通りの部分はまちなみがつながっていけるように、みんなの意識が高くなっていくことが必要だと思います。

吉原：私も自助努力が一番大切であると考えていますが、行政の役割は非常に大きく、行政にしか出来ないことも多いと思います。

藤井：古い建物に対して、否定的な考え方ではなく、「こんな良いところがある」という考え方に

転換していかねばならない。そのために必要なのは良い意味での「誉め合い」なんです。相互批評、そして誉め合い。そうすると「そうか、こんなに良いのか」とわかる。それから自助努力だけではとても無理なので、行政も考えなければならぬと思います。市民の意見とか、市民参加型でなるべくオープンな形で、市が積極的に役割を果たすと良いのではないかと思います。上越市にも「景観賞」がありますよね。大きな景観賞ではなく、小さな景観賞、個人的な生活の視点にも市が積極的な誉め合いをしたらどうでしょうか。編：ありがとうございます。手前味噌ですが、本日の座談会を旧師団長官舎で行ったことも歴史的な建造物の活用の一つかと思っています。どうもありがとうございました。



ドイツのカールベクスさんが茅葺きの民家を改装した住宅事例。(一般公開はしていません)



藤井恵介助教授
東京大学大学院工学系研究科
建築学専攻建築史研究室



吉原耕一さん
長養館専務。
周辺の景観に配慮した黒塙は
景観デザイン賞にも選ばれている。



青山栄子さん
直江津の座敷蔵を活用した
会席料理のお店を営む。
上越市景観審議会委員。



柴田貞夫さん
大町3丁目の町屋にお住まい。
土間はミニギャラリーとして使用
されています。



市では市民の皆さんに景観への関心や理解を深めていただき、美しく魅力のある景観づくりを行なっていくことを目的に、平成7年度より「景観デザイン賞」を実施してきました。昨年度は市の景観全般を対象にした「景観部門」のほか、美しい景観づくりに貢献している市民や団体の活動を対象とした「まちづくり活動部門」を設けました。ここでは89点の応募の中から受賞された景観、活動を紹介します。

景観部門



大杉屋惣兵衛

所在地/土橋715
推薦者/星野 勉 所有者/宮越信行

旧街道沿いの風情が残り、大木に囲まれた敷地に相応しい歴史の流れを思わせるお屋敷です。明治時代、昭和初期に造られた建物は、300年前の創業当時の趣をそのまま伝えていように見えます。お庭を囲む大木、裏手に残る蔵、建物の前に立つ「あやめ」の石塔。これらが絶妙な調和を見せてくれます。伝統を守り抜こうとする姿勢が強く感じられます。



日朝寺のしだれ桜

所在地/寺町3-5-43
推薦者/川上 弘 所有者/遠藤教宣

樹齢200年にもなる老木は、元気で迫力があり、緑の森に覆われた寺院群の中でピンクの明るさを際立たせています。明暦期に建立された本堂、毘沙門堂、美しい前庭の苔とともに、いつまでも守って欲しいと思います。



料亭宇喜世



料亭宇喜世

所在地/仲町3-4-5
推薦者/池田敏一、高橋康子、田中 稔
所有者/寺島 亨

歓楽街の一角で、緑に囲まれた独特の寛裕を持つ料亭建築が目を惹きます。茅葺屋根で櫺の1枚板の重厚な門構えが、明治からの時の流れや雪国の文化を感じさせます。



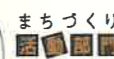
MARUWA KCK 福田寮

所在地/福田491-2
推薦者/大嶽清和
所有者/(株)MARUWA KCK

従来の低層集合住宅にはあまり見られなかったシャープでモダンなデザインは、快活な独身者の寮に相応しいと思います。地区計画による規制を上手く活用して配置、外構を計画したことも高く評価できます。



まちづくり活動部門



紫陽花会

推薦者/田崎秀尚 活動者/紫陽花会

活動内容:正善寺ダム周辺で、平成11年から地域の青年が中心となって約5,000株のアジサイの下草刈りや剪定・冬囲い・追肥などの作業をボランティアで行い、見事な花を咲かせています。

講評:地域の資源を生かすということに着目し、地域の力で年間を通じた活動を行っている点を評価します。また、「しくみづくり」も上手く行なわれており、将来に向け多くの可能性を秘めていることが伺え、今後の活動に期待します。



西横山しだれ桜を守る会

推薦者・活動者/西横山しだれ桜を守る会

集落の活性化や伝統文化の継承を地域のみならず考えており、その一環として地域のシンボルである「しだれ桜」の保存に取り組んでいます。



青田川を愛する会

推薦者・活動者/青田川を愛する会

10年以上にわたり、クリーンアップ活動、沿岸植栽活動、自然調査、ガイドブックの発行、小中学生の河川学習の助成などハード、ソフト両面ともに積極的に幅広い活動を続けています。



フィッシャリーナ

所在地/有間川漁港
推薦者/大崎正栄、横山孝一

連なる山並みの緑とガラス張りの開放的な休憩施設が、心地良いコントラストを成しています。施設と背景の山並みがボートのカラフルさと相まって、借景のような雰囲気を出しています。



高田公園散歩道

所在地/高田公園
推薦者/竹内敬吉

市民の誰もが知っている高田公園の風景ですが、上越市以外の人にとっては、高田を初体験する代表的なスポットではないでしょうか。「春の華麗なる桜」、「夏の輝く緑」、「秋の落ち葉のじゅうたん」、「冬の銀世界」と季節の移り変わりを楽しめます。

第8回 上越市景観デザイン賞

THE 8th
LANDSCAPE
DESIGN
AWARDS



花いっぱい上越



推薦者/田崎秀尚、花いっぱい上越
活動者/花いっぱい上越

市民プラザや上越文化会館など、多くの人々が集まる施設を中心に花壇を整備し、訪れる人々の目を楽しませてくれています。市内全域に渡る活動が評価されました。



御殿山町内美化運動



推薦者・活動者/御殿山町町内会

特に、子ども達に積極的な参加を促しています。子どもの頃から地域の景観形成活動に参加できる仕組みは大変重要であると思われます。



福田橋花いっぱい実行委員会



推薦者/田村正信
活動者/福田橋花いっぱい実行委員会

地域の公園を老人会、婦人会、子供会、町内会など地域の人々の手で整備し、美しい花を育てています。



大曲保育園



推薦者/田崎秀尚
活動者/大曲保育園

保育園の前にある花壇を整備し、通る人々の目を楽しませてくれています。このような小さな活動も、立派な景観形成活動の1つです。

◆景観デザイン賞審査委員

荒川 毅/JCV上越ケーブルビジョン記者
伊藤 春男/作家 日本庭園協会新潟支部副支部長
関 由有子/せきゆうご設計室代表
筑波 進/市美術・デザイン専門員
横山 郁代/平成14年度市民アート・ディレクター
渡辺 啓子/上越教育大学院生 春日小学校教諭
(審査当時)

第8回 景観デザイン賞

プチ景觀 みつけた!

Petite landscape in Joetsu

「照明」

夜のまちを照らすだけでなく、時にはまちの雰囲気を演出するあかり。個性的な照明器具のデザインが施されていることもあります。

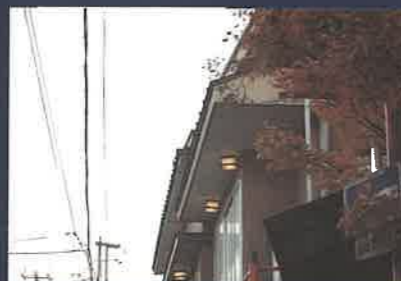
今回のプチ景觀では照明に注目! みなさんもナイト・ウォッチングに出かけませんか?



雁木を歩いていたら、和紙で作った手づくりの照明を発見! あたたかく、やわらかい感じ。(東本町)



信越本線をくぐる謙信公通りの歩道。まちなかに突如現れた洞窟のよう。この上に新しい春日山駅のホームの一部がある。



仲町っぽい艶っぽさ。(仲町)



小川未明の描いた世界にはこんなハイカラな照明がありそう。照明が人間ばいですね。(高田公園連見橋)



火事で焼けた町屋の再建と共にまちづくり協議会主導で整備された照明。与力の持った照明のように、今日も仲町の治安を守ります。照明同士の間隔が作り出すリズムにも注目。(仲町)



昭和を彷彿とさせる照明。家にちゃぶ台があった時代。(中央)



二人が腕を組んでいるようなあたたかいデザインの照明です。「人は一人じゃないんだ、腕を組んでお家に帰ろう…」と語りかけてくれます。(雅子妃の森)



石垣の上からよきと控えめに覗いている。宮崎駿のアニメに出てくる森の妖精みたい。(春日山)



サングラスをかけている、お洒落なお兄さんみたいです。今日も粋に遊ぶぜ!(土橋)

プチ景觀 みつけた! 「照明」



鳳凰は、夏を表す四神の一つ。この照明は毎年盛大に行われる祇園祭を一層引き立ててくれるのではないのでしょうか?(中央)



大学という学び舎の近くにふさわしいデザイン。先端の為、わかりづらい?(大学前)

?心地よい 照明ってどんなもの

照明デザイナー
稲葉 裕

上越市内を見渡すと色々な「形」の街路灯が目撃されます。これって本当に良い照明デザインなのでしょうか。

私達の視覚は実に五感の87%を占めています。ちなみに聴覚は7%ほどです。考えて見ればモノを見ることが出来るのは光のおかげなのです。視覚伝達を心地良く忠実に実現してくれる光が良い照明でありそれを点灯する装置が照明器具ということになります。

では、心地良く忠実に実現してくれる光とはどんなものなのでしょうか。

周辺が明るい時、あるいは眩しい光が目に入ってくる(グレアが有る)状態の時だと、瞳孔が絞られた状態になり、物が見えにくくなって非常に不快になります。心地良い光とは眩しい光(グレア)が無い状態を指しています。

光の色味を色温度と言います。太陽の動きを思い出すと太陽が低い時(日の出・日の入)は赤っぽい光で、また高い時(南中)は青白い光に見えます。それと同じように「赤っぽい光を色温度が低い」「青白い光を色温度が高い」と言います。色温度の高低は明るさの明暗と密接な関係があり人間の心理に大きく影響します。低い照度の場合には色温度が低い(赤っぽい)光源の方が気持ちが悪くなります。逆に低い照度で色温度が高い(青白っぽい)光源の場合は陰気になります。

また、光には「忠実に色を実現させてくれる光」があります。太陽の光や最近の美術館などで使用している光源がそれにあたります。

以上の事から「良い照明デザインとは」、色をなるべく忠実に再現出来て気持ちが悪くも光源を使用したグレアの無い照明器具と言うことになります。

そのような視点でもう一度、上越市内を夜間歩いて見てはいかでしょうか。「良いと思っていた照明器具」が必ずしも「良い照明」ではないことに気付くはずですよ。



かがり火も現代になるとこのようにスタイリッシュ! 竹で作ったかのようなしなるラインに「和の雰囲気アリ!」です。(高田公園)



何だかとても新体操!! 「はっ! びたっ! 決まった〜!」(川原町)

普 段何気なく歩いて
いるまちなかも、
地図で確かめたり、カメ
ラ片手に歩いてみると、
今まで気付かなかったこ
とを発見したり、不思議
なものを見たりする
ことがあります。
今回、みどりの少年団の
子ども達に実際にまち歩
きを体験してもらいました。

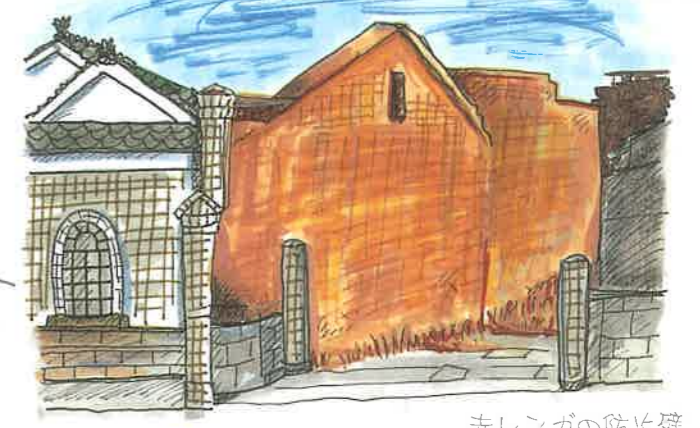
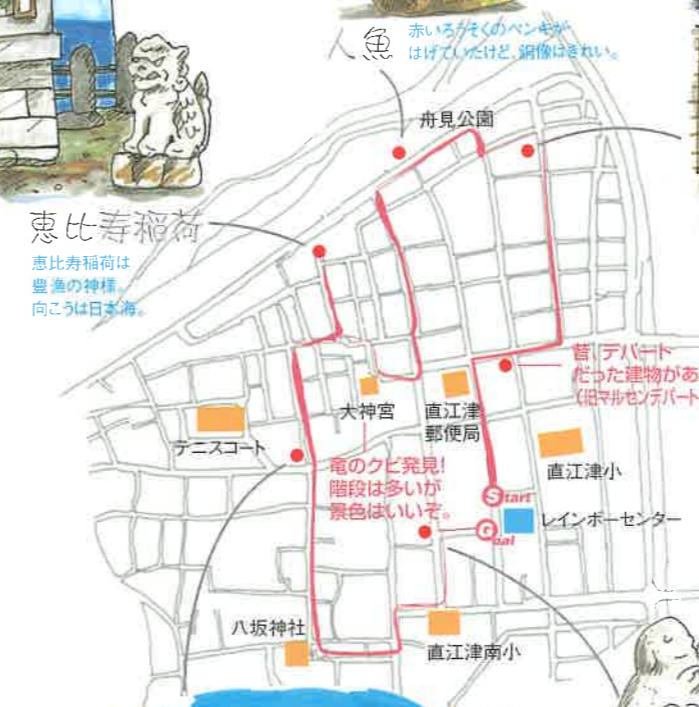
1 まちなか探検の心得

- 第1条 とにかく面白いものを探すこと
ヒント：建物、看板、木… などなど
- 第2条 カメラ、スケッチ、メモでとにかく
記録すること
- 第3条 車に注意。また人の迷惑にならない
こと

みどりの
少年団は市内の小学
4年生～6年生の子供たちによ
り結成されている団体。普段は樹木
の手入れや草木の観察などを通じて自
然を愛し守る心を培っています。今日は森
から離れ、まちなかを探検してもらいました。



まちなか 発見地図



赤レンガの防火壁
洋風レンガに和風の瓦。
ライオンまでいる



ライオン像
空を見ている



風力発電
舟見公園から見る風力発電。
動いて良かった。

2 探検のコツ3か条

- 第1条 好奇心を目覚めさせること
- 第2条 まちの謎を発見したら推理し
てみよう
- 第3条 まちの事に詳しい人や住んで
いる人に聞いてみよう



「石に書いてある
なんですか!」
江戸時代の和算家・
小林百喙の墓の跡



思いがけず高遠回漕店のなかを見せていただきました。大きな
時計、昔のボックスなど、大正時代ヘタイムスリップ!



※直江津のまちは小路(しょうじ)が多く、家が立ち並んで
いるので、大道に出るところで注意が必要。(まちの子
どもへの思いやり)

子ども まちなか 探検隊

Children's exploration groups

- 金森有佑 隊員
- 前田瑞希 隊員
- 佐藤 譲 隊員
- 杉山奈々恵 隊員



謎の足あと*
石碑裏の文字を
調査中

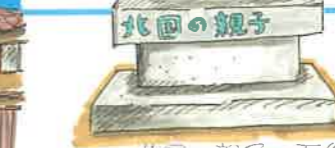


天王川で環境調査中!

「大きくて
霽回気のある
木だな～」



さすがは緑の少
年団。目のつけ
どころが違う。



北国の親子の石像
お母さんの後ろに小さな子どもがいる。
直江津信金船。

あづま湯 むかしと変わっていない。

3

報告の場で…

- 1 各自発表 どこで、何を、ど
う思ったか?
- 2 お宝の分類。メモ、写真など
の整理。
- 3 地図に書き込む!

4

みんなの感想

- ・不思議なものがたくさんあった。いつ
までも残るといいな (前田瑞希隊員)
- ・知らないところがたくさんあって面白
かった (杉山奈々恵隊員)
- ・やっぱり足跡がすごい不思議だった
(佐藤譲隊員)
- ・昔の建物や物が残っていたことが印象
的だった。これからも昔ながらを守っ
て欲しいな
(金森有佑隊員)



たった、1時間半のまち歩きでしたが
多くの発見がありました。これらはみ
んなまちの財産! 皆さんもまち歩きを
して、そして自分達だけのお宝マップ
を作ってみませんか?
みどりの少年団の皆さん、どうもあり
がとう。これからもまちの魅力をたく
さん発見してね!

まちは舞台！ みんなが主役

Our town is a stage! We all have a major role!

建・築・物・の・色・彩

The Landscape Seminar
~color of building~

上越市では、景観形成に対する意識高揚、知識向上のため、平成12年度より「色彩」、「照明」、「サイン（案内標識）」などをテーマに『景観セミナー』を実施してきました。

14年度は、色彩計画家の吉田慎悟氏を講師に迎え、市内の建設・建築業者、行政職員ら40名が参加し、『市営子安住宅1号棟の色彩計画』をテーマに3回に渡って実施しました。参加者はグループごとに、「市営子安住宅1号棟」に相応しい「色」を提案し、その結果は、色彩決定に反映されました。

上越市では、美しい景観づくりを目指して、今後も引き続き『景観セミナー』を実施していきます。

【子安市営住宅について】

上越市が、市内子安地区にて、集合住宅4棟、コミュニティ棟、芝生広場、ポケットパークなどからなる集合住宅団地を整備する計画です。今回のセミナーの題材となった「子安市営住宅1号棟」は、この計画の最初の工事として平成15年5月に竣工し、8月から入居の予定です。



現地調査

子安市営住宅の建設地で周辺色彩などについての調査を行いました。



色彩検討

現地調査の結果をもとにグループごとにデザインコンセプトやカラープランを検討し、提案する色彩を決めました。

色彩提案

グループごとにプレゼンテーションボードを作製し、提案内容を発表しました。各グループの提案について、講師の吉田慎悟氏より講評をいただきました。



「景観形成に関する届出制度のお知らせ」

市では適正な景観形成への誘導を図るため、「景観形成に重大な影響を及ぼす行為」等を指定しました。これにより一定規模を超える建設等の際には市への届出が必要となりました。詳しくは都市計画課景観推進係までお問合せください。

東京の小学生が 雁木視察

東京都青梅市成木小学校5年生22名が雪国の生活に直接触れるため、雁木を見にきました！

〈感想〉

- 雁木の下を通れてよかったです。雁木の便利さに気付きました。
- 上越市は雪がふっていて歩く時大変だったけど、雁木が作られていてとても便利でした。
- 上越の人達のように優しい人になるようがんばります。
- これからも雁木を調べてみたいです。そして、もっと雁木を増やして欲しいです。



From Readers

読者からのお便り

景観第4号にもたくさんのお便りをいただき、ありがとうございました。寄せられた情報の一部について、編集委員がお応えします！

まちは舞台！
みんなが主役



いでしょうか。蓮に寄生する虫が原因とも言われていますが、もともと泥中に存在する虫なので、対策等については今後も調査・研究の必要があります。」高田公園の蓮がますます、市民のみなさんに愛されるようになってほしいです。(川合)

特 別企画「みちとの遭遇」、私はソーグーと読まず出会いと読みました。私が子どもの頃は、医者の子も金物屋の子も一文店の子も素足で下駄を履き、風呂敷に算術・読方の本を包んでいました。73年か74年前の西蒲原郡の小さな村の道を思い出しました。

厚生南会館前の朱塗りの橋を中心に南北の堀の中央部に蓮の葉が出ません。どうしたことかと散歩の度に見ています。

西城町：榎山直令(故人)

上 越市委託のグリーンキーパーとして樹木管理のアドバイス等をしている小池賢治さんにお聞きしました。

「蓮は土の中の地下茎から葉を出すので、5月の土の温度によって生育に違いが出ます。一昨年の5月は気温が高く、同じ時期でより多くの蓮の葉が出ていたため、昨年の出方を少なく感じた方もおられるのではな

関 川は上越市のシンボルです。この関川の治水・利水・美化・景観について、市民を中心に産・学・官が集まって「みんなの川づくり」を進めているグループに「関川水辺クラブ」があります。これからの関川の景観整備がどう進められるのを楽しみます。国土交通省高田工事事務所を取材してみてください。

長者町：佐藤

水害の改修で発生した残土や河口に堆積した土砂を盛土に使っています。いつかは高田公園の桜につながる美しい景観を育て、子供や高齢者、看護大学の学生や病院に来る人々にも親しまれる水辺にしていきたいと考えています。

上越大橋から中央橋間の約2キロは、各町内会と学区の小学生の皆さんが参加する「水辺の学校」プロジェクトを進めています。急傾斜の護岸を緩やかな土の斜面にすると、水位変化に順応する動植物の成育空間（エコゾーン）がぐっと大きくなります。



確かに水は怖いこともありますが、豊かな生態系の宝庫です。地域の川に親しんでもらいたいと思います。」

丁寧に説明いただき、ありがとうございました。(関)

中 中央橋上流右岸で、2年前から工事を始めた「新南町桜づつみ」は、国と上越市共同の『関川水辺プラザ計画』の一部です。治水・利水・環境という3つの大きな柱を掲げ、

編集後記

今回の特集では平成13年度に上越市創造行政研究所がまとめた「歴史的建造物の保存と活用に関する調査報告書～歴史的な建物と景観を活かしたまちづくりに向けて～」を参考にしました。この調査では東大の藤井研究室のほか6人の市民の皆さんが参画されており、高い評価を受けています。「景観」の編集においても、市民編集委員

の皆さんに企画の段階から参画していただいております。市民の皆さんとともに景観を発見し育てていくことを目指しています。

表紙写真/西城町の聖公会高田降臨教会と紅葉幼稚園。春の昼下がり、お母さんと一緒に帰る道。

裏表紙写真/北方の茅葺き住宅。住む人の凛とした生き様が感じられる。

編集委員/魚家明子(詩人)
太田均(デザイナー/本誌アートディレクター)
川合将也(上越市地球環境大使)
佐藤和夫(出版家)
せきゆうこ(建築家)
樋口喜美代(イラストレーター)
宮崎朋子(カラーコーディネーター)
横山郁代(まちづくりファシリテーター)
渡部智子(映像・広告会社勤務)

発行/レイチェル・レイトン
行/上越市都市整備部都市計画課